

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦方言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003027">https://doi.org/10.15084/00003027</a>

方言録音資料シリーズ ー7

# 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦方言

上 村 孝 二 編

1 9 6 8

このテキストは、総合研究「地方における話しことば教育法改善のための基礎的研究」（代表者大石初太郎）の一部として、研究用の資料として作られたものである。

方言の録音方法、方言の表記の方法などのあらましについては、別に作った「方言の録音とテキストの作成について」（国立国語研究所 話しことば研究室編）を参照されたい。

ここに収めた方言の録音とテキストの作成とは、鹿児島大学教授 上村孝二 が担当した。

# も く じ

収録地点とその方言について.....	2
表記について .....	4
本文	
1. 鹿児島見物 .....	5
2. 民話：本妻と情婦.....	13
3. お祭り .....	17
4. 海の遭難 .....	26
注 .....	37

## 収録地点とその方言について

### 1. 収録地点名：鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦

### 2. 収録地点の概観

宮之浦（人口4,500）は早くひらけた港だ。藩政時代には奉行駐在所がおかれた。今日も高等学校、裁判所、上屋久役場などあり、文化政治の中心地である。なお安房とともに島の表玄関でもある。ほとんど農業に従事するが、昔は飛魚漁期（4月～6月）には男子は漁獲に参加するものであったが、今日は漁は不振で、むしろ屋久島発電所などの工場が出来この方に勤める人が多くなった。鹿児島から直航の定期船（5時間要）が着き、種子島への渡島もこの宮之浦港を利用する。最近では登山と観光の客の往来はげしく、シーズンは港は活気を呈する。屋久杉、木炭などの外農産物では甘藷が主である。

### 3. 収録した方言の特色

屋久島方言は種子島方言と違い、うんと薩隅方言に接近する。しかし薩隅方言を区分するときにはやはり特殊な位置に立つ。今鹿児島地方の方言と比較してみると次のような諸点がちがう（宮之浦方言だけについて比較）

〔音声〕1. 母音エは〔e〕であって〔je〕ではない。

2. オ列長音において〔au〕系〔eu〕〔ou〕系のものはすべて〔o:〕だ。

3. カーキ（柿）ナーミ（波）のようにイ・ウ列音節の前の母音は長い。

4. 母音を短音化することもあるが、鹿児島方言のように徹底したものではない。

5. ガ行鼻音（語中語尾）を使う。

6. タ行音カ行音は稀に濁音化する。

7. ジ・ヂ、ズ・ヅの別はない。

8. 〔r〕音の脱落がはげしい。又その結果母音が重複するので〔j〕〔w〕などが挿入される。

9. ダ行音はラ行音化する。ザ行音もダ・ラ行音化する傾向がある。

10. 入声音はない。

〔文法〕1. 敬語法は発達していない。助動詞による敬意表現も稀だが、文末助詞でその代り補うということも十分でない。

2. 薩隅方言の準体助詞トの部分ヲに言う傾向。ヨカテヤロ（いいのだろう）

3. 類似の意 ゴトアルもゴテアルという傾向。

4. 断定の助動詞はジャもあるがヤ(ヤル)などが特色。
5. 逆態の「けれど」はバッチである。
6. 由の「から・ので」はカラ(カー)である。
7. 文末助詞にナオ(いい晩ナオ), ……モンノ(のに, ものを)がある
8. 肥筑方言のように<sup>ねー</sup>対格にヲ(オ)の外にバを用いる。
9. 肥筑方言のように形容詞のサ語尾詠歎法がある。日ノ長サノ(長いことよ)

〔語彙〕① スバトー(てんてこ舞する) ② キムル(叱る) ③ トビウオドリ(時鳥)  
 ④ ワスル(来られる, 唯一の敬語動詞だが敬意はそう高くない) ⑤ オミ(あなた, 御身) ⑥ ショイナゲ・セシナゲ(下水留)

○は種子島と共通。

#### 4. 地点選定の理由

薩隈方言を録音テープで聴くばあい、薩隈本土中ではどこの方言を採録しても他県人には一様に聞えると思ひ、思い切って離島から選ぶことにしたもの。入声音のないこと、アクセントが鹿児島地方と違い二型アであっても次のような高低を示すことなどで(三音節語以上に頭高があらわれるなどで)、鹿児島ばなれが感じられるであろう。

宮之浦 a型     $\bar{o}$ ガ    $\bar{o}$ o    $\bar{o}$ oガ    $\bar{o}$ oo    $\bar{o}$ ooガ  
 b型     $\bar{o}$ ガ    $oo$     $oo$ ガ    $ooo$     $ooo$ ガ

屋久弁の方が鹿児島弁より一般にわかりやすいだろう。

## 表 記 に つ い て

〔指定の字母以外に使用した字母，および使用した補助記号〕

特になし

1. 文末助詞 na:, ne:, naoの類はすべて前文にくっつけて表記した。
2. 断定の助動詞 zja, jaなどはやはり自立語的なので離して表記。
3. 敬謙表現はほとんどなきにひとしき状態だし，文末助詞が十分代って働いているとも思えないので，男女，老若の差が感じられないほどぶっきらぼうの標準語訳になっている。やむを得ない。

# 1. 鹿 児 島 見 物

録音日時 1967年7月18日

録音場所 宮之浦 田代旅館

話し手

(略号)	(氏名)	(性別)	(生 年)	(職 業)	(居 住 歴)
A	岩川シオ	女	明治29年生	農業	宮之浦に生れずっと現在まで居住
B	松田助市	男	33年生	木炭製造業	0才～18才在郷, 19才八幡(北九州市)20才(和歌山市)21才～24才(佐世保海兵団入隊)45才～46才(召集, 南方へ)46才～現在(在郷)

解説: Aが親類の子供が鹿児島市の病院に入院しているのを見舞に鹿児島に行って来たと言え  
ば, Bは初耳だと答え, 宮之浦も大きくなったので, そのことは中々耳に入らないものと話し  
合う。ついて, お互に鹿児島の風景のよさ, 最近の大きく発展して行くありさまを以前の鹿児島  
と比べて語る。ついに交通事故も多くなったことに及ぶ。Bは鹿児島では交通事故に注意せよと  
子供らに注意をうけるほどであると言う。も一度鹿児島に遊びたいが腰痛もあり出られそうもないとも  
言う。終りに指宿のヘルスセンターのことに及ぶ。

A konogoro kagosimai itaq mitaya kagosima honno-  
このごろ 鹿児島に 行って 見たが, 鹿児島は ほん

kote mo: benna tokoino goto naqçjoqtejane: oja  
とに もう 別な 処の ように なっているのよ。 私は

siɸonen mae itatekara konda hazimeci itato jaq-  
4, 5年 まえ 行ってから 今度は 初めて 行ったの だっ

taja  
たが。

B wa: nanno jo:zide itatokai  
あんたは 何の 用事で 行ったのかい。



A oja itokoga bjoinni nju:in sicjoqta mon zjaka:jo  
私は いとこが 病院に 入院 していた もの だからよ。

B bjoinni nanno bjo:kidejo  
病院に? 何の 病気でなの

A kega sicjoqtejo a:sjo cunmajecjoqte.... ano  
怪我 しているのよ。 足を 折り曲げていて .... あのう

mimai itatojagajo  
見舞いに 行ったのだよ。

B kega dokode kega sitatokajo  
怪我? どこで 怪我 したのかね。

A dokode kega sitaka dokoka jakurenka<sup>(1)</sup> doqkade  
何処で 怪我 したか、 どこか 屋久電か どこかで

kega sitato jaqdoğa  
怪我 したの だろう。

B jakudenni dejoqtatoka soja  
屋久電に 出ていたのか それは。

A dejoqtato jairo  
出ていたの だろう。

B N:nda hazimeci jaga  
うん。わしは 初めて だが。

A wanta hacumimi zjaqtajoga jaqpai mo: imawa  
あんた達は 初めて だったろうよ。 やはり もう 今は

mukasino gotenakawai mukasja muraga komar  
昔の ように ないわい。 昔は 村が 小

kaqtaga su iyki wakai joqtabaqci mo: imawa na-  
さかったが、(言いまちがい)すぐ わかる ものだったけど、 もう 今は な

kanaka wakainiqkagane:  
かなか わかりにくいよね。

B N: sa: mo nantoka jai monno hamadore<sup>(2)</sup> sinda<sup>(3)</sup>  
うん、そう もう 何とか だ もの。 浜戸で 死んだ

hita: waqdano-sja<sup>(4)</sup> sijan jona mon zja monne:  
人は 脇町の連中は 知らない ような もの だ ものね。

A soijō mo ima: gaqcuī waka:ndo nanga nandē-  
そうよ。 もう 今は ほんとに わからない。 何が 何てや

(5)  
ka zjaijō hosite mo kodonmojō: ojanō namae-  
ら だろうか、 そして もう 子どもね、 親の 名前

remo iwannja mo raga koreka zjaijō mo hito-  
でも 言わなきゃ もう 誰の 子やら だろうか、 もう 少

cumo sijaN  
しも 知らない。

B honnokoq zja mo hitocumo wakaraN  
ほんとう だ。 もう 少しも わからない。

A wanda siqcjokaq sijaNbaqci nda mo hitocumo  
あなた達は 知っているか 知らないけど、 私は もう 少しも

sijaNdo mo tosjo toqtaja  
知らん もう 年を とったら。

B ndomo ndomo hitocumo wakaraN  
わしも (言いよどみ) 少しも わからない。

A sonna mon zjaqtojone: jononaka cjuwa mo:  
そんな もの だよ、 世の中 と言うのは もう。

uqtekawaqte sitakuo sitakuḡa ciḡai mo nan-  
うって変わって (言いまちがい) 支度が 違い、 もう なん

zjakanzja minna ciḡo:teku<sup>(6)</sup> hakimonka:ra  
だかんだ みんな 違って行く。 履物から

kimonka:ḡa ciḡocjoqte ja monno  
着物からが 違っているん だ もの。

B zjara:i<sup>(7)</sup>  
そうだわい。

A mata kaḡosimanande itate meba beqkaku mata  
又 鹿児島などに 行って 見れば、 別格 又

ciḡo:waine:  
違うわいね。

B ma: kaḡosimamo naḡo itacja miranḡa ciḡocjoq  
まあ、 鹿児島も 永く 行っては 見ないが、 違っている

zjaro:jo  
だろうよ。

A kaposimano tenmonkanni ita tokja biqkui  
鹿児島 天文館に 行った 時は びっくり

suraine: hitono o:ka kotojo  
するわね。 人の 多い ことよ。

B zjarai  
そうだわい。

A joke: hasiqcjo<sup>n</sup>na kuruma: kurumato densja-  
余計に 走っているよ 車は。 車と 電車

nimo noitoan<sup>(8)</sup> goto an<sup>n</sup>da batabasicjoeba noiso-  
にも 乗りきれない ように あるよ。 うろうろしていれば 乗りそ

kono goto aqdo  
こなう ように あるよ。

B honnara mo: to:kjo: cju:cibaqcimo<sup>(9)</sup> kaposima-  
それなら もう、 東京 と 言うけれども 鹿児島

mo heq jaqpai jao ikandone:<sup>(10)</sup>  
も (息づかい) やはり ざっと 行かないね。

A jao ikan dokoikai<sup>(11)</sup> mukasika: utaga aqzjaneka  
ざっと 行かない どころかい。 昔は 唄が あるではないか。

jakuzja mijanoura tanedewa akoyi<sup>(12)</sup> meisjodoko-  
「屋久では 宮之浦 種子では 赤尾木 (言いまちがい)

ka meisjodokorowa kagnosimato utaga aqzja  
(言いまちがい) 名所どころは、 鹿児島」と 唄が あるでは

neka wa:  
ないか あんた。

B so: so:  
そう。 そう。

A sone<sup>n</sup> ju:te wa: mukasika:no meisjo ja monno  
そんなに 言って あんた、 昔からの 名所 だものね。

soinja maenja sakurazimao hikaete nancj  
それには、 前には 桜島を ひかえて 何とも

uwa na: Nnai honni  
言え ないわね ほんとに。

B kaposimamo taihenna<sup>(13)</sup> mo nao hiro: naqta mon  
鹿兒島も 大変な もう なお 広く なった もの

zjagane:<sup>(14)</sup>  
だからね。

A mo: iqpai hiro: naqteta mon konda tanijama  
もう いっぱい 広く なっていた もの。 今度は 谷山

made hiqko: de kite nao wa: buto: naqta wa  
まで 引きこんで 来て なお あんた、 広く なった あんた、

kaposimamo  
鹿兒島も。

B tanijama no bundemo wa: akena hirokaqtatojo  
谷山の ぶんでも あんた、 あんなに 広がったのよ。

A mo son ima: nanbai mukasino nanbai naqcto-  
もう そのお 今は 何倍、 昔の 何倍に なって

to ja monno mo: ano nan(cuka) josinono hen-  
いるんだ ものね。 もう あの 何と言うか、 吉野の 辺

ka: zu:qto epa deketene:  
から ずっと 家が 出来てね。

B zjao honna' ita tokja josinon henna ma:ra<sup>(15)</sup>  
そうだろう。それなら 行った 時は 吉野の 辺は まだ。

A zju: takuga deketete hanasi na: Nŋa  
住宅が 出来て 話に ならないよ。

B josino henna ma:ra honno inaka jaqtaga  
吉野の 辺は まだ ほんの 田舎 だったよ。

A motowa hitoi saiki joqtaga imadoma: rokoga  
もとは 一人 歩くもの だったが、 今は ところが

dokodeka zjao: mo hitocumo waka: Ntojo  
どこなんだやら、 もう 少しも わからないのよ。

B so  
そう。

A wa: kononora ikantokai  
あなた: この頃は... 行ったのかい。

B mo oimo nago: ikanro:  
もう わしも 永く 行かないよ。

A aqpai cjoicjoi ikannjanejo ano waka:N gote  
やはり... ちょいちょい 行かなければね、 あの わからない ように、  
nao naqtekudo<sup>(16)</sup> mo cigo:te kita monno  
なお なって行く。 もう 違って 来た、 もの。

B iko:to omocjoqtaqcimo kosiga itaka moN zjaka'-  
行こうと 思っているも 腰が 痛い もの だから  
ne:  
ね。

A zjaya zjaya tabemonna cigausi  
そうよ... そうよ... 食いものは 違うし、

B ko:cuzikode mo: ha: de:moN<sup>(17)</sup> zjaya ha:  
交通事故で... もう ほら おお事 だよ、 ほら。

A zja: dokoizja naka<sup>(18)</sup> mo soi ieba kanpija naka  
そうである 処では ない。 もう それを 言えば 限りは、 ない。  
mijaNrani oqtemo ko:cu: zikonja o:to jaro  
宮之浦に... いても 交通事故には... 逢う だろう。

B jo: so ja mo:  
うん。 そう だ。 もう。

A zibunni kio kikasite sja:Nto site mae usi-  
自分に... 気を 利かせて... ちゃんと して 前 後ろ  
to: mite saikeba hitocumo kega suru sewa:<sup>(19)</sup>  
を... 見て... 歩けば... 少しも 怪我 する 心配は  
nakatojo jaqpai kokodemo batabata sicjoeba  
ないのよ。 やはり... 此処でも うろろろ... していれば、  
kega suqto jaro  
怪我 するの だろう。

B ha: konomae ita tokinanda mo musikoya gaq-  
はあ。 この前 行った 時なんかは もう 息子が ひど

cui sinbai site (aha) sinpai sunnaci juba-  
く 心配 して (息づかい)「心配 するな」と 言う

qcimo kikanto jaba  
けれども、 きかないの だよ。

A jaqpai kowa oja omo:tojo (B N'N') sinbai  
やはり 子は 親を 思うのよ。 (うんうん) 心配

site ke keganado saseja senkaci jaqpa omo  
して (言いざし)怪我など させば しないかと、 やはり 思う

dokoizja naka  
どこでは ない。

B oja: antacino sinpai sendemo kaiunde soiko-  
わしは お前たちが 心配 しなくても 海軍で それこ

sa gwaikokumo zu:qto sa saicjoru otoko  
そ 外国も ずっと (言いざし)歩いている 男

jaba nanno sonna sinpai siya ijan<sup>(21)</sup>ci jubaq-  
だよ。 何の そんな 心配 しなくても よいと 言う

cimo zi:cjan mukasito imawa aha cigote jaba  
けれど、 「爺ちゃん 昔と 今は (息づかい) 違うの だよ。

soren son jokubaqta kocu i:jan<sup>(21)</sup>naci ehe……  
そんな その 欲ばった ことを 言いなさんな」と (息づかい)…。

A zja: rekoizja naka mo mukasito imato ciDo:te  
そうである 処では ない。 もう 昔と 今と 違って

mukasino nagasaki<sup>(21)</sup>ga imano jakusimano jona  
昔の 長崎が 今の 屋久島の ような

mon zjaqto jaro sono ata:i kangecjorannja mo  
ものであるの だろう。 その 当りに 考えていなければ、 もう

kaosimanimo meqtani de ja na:nnai mo ima:  
鹿児島にも めったに 出られは しない、 もう 今は。

B N: nakanaka buqso zjai monnone:  
うん、 なかなか 物騒 だ ものね。

A buqso:jo ikudemo mo: ikuto omoeba hiko:ki-  
物騒よ。 行くにしても もう 行くと 思えば、 飛行機

ka:demo hunemo naNromo kurusi jokato jabaqci  
でも、 船も 何度も 来るし、 結構だ けれども

nakanaka itateka: sa:kiga mo hitoiaruki ga  
なかなか 行ってから 先が もう 一人あるきが

dekeN goto naqtai toinamoNni naqtaja mo  
出来ない ように なったり、 年寄りに なったら もう

baqtai mo na:NNjo<sup>(22)</sup>  
すっかり もう 駄目だわい。

B naNtokano ano hara ibusukino herususeNta:ni-  
何とかいう あの ほら 指宿の ヘルスセンターに

mo itate azaika asura kotoga aqtaja  
も 行って ずいぶん 遊んだ ことが あったよ。

A oja ahikonja itacja mijantone: ibusukinja  
私は あそこには 行っては 見ないのね。 指宿には。

hokaN tokoja mo iqpai mawaqcjoqbaqcimo mo:  
外の 処は もう みんな 回っているけれども もう、

ibusukidakeja ikanzja<sup>(23)</sup> konomae ikoja cuta-  
指宿だけは 行かないんだよ。 この前 「行こうや」と言った

baqci sonnai ikanzi soa isogasusite modoqte  
けれど、 そのまま 行かないで ほら、 忙しくて 戻って

kita tokini  
来た ときに。

B modoqteka: amega huqte wa: (A e:) aqzawaika  
戻ってから 雨が 降って あんた、 (ええ) ひどく。

A amenō hiwa mo haqtai mo na:NNaine: (B N')  
雨の 日は もう 全く始末に おえないね、 (うん)

dok'odemo sosite mo: bjo:ninmo mo: jo: naqte  
どこでも。 そして もう 病人も もう よく なって

warai jokaqtajo  
大変 よかったよ。

B zjara i maq……  
そうだわい。 まあ ……。

## 2. 民話：本妻と情婦

録音日時 1967年7月18日

録音場所 宮之浦 田代旅館

話し手

(略号) (氏名) (性別) (生年) (職業) (居住歴)

A 岩川シオ 女 明治29年生 農業 宮之浦で生れずっと居住。

解説： 本妻の外に情婦をもつ男が情婦とかたかって、本妻をもどし情婦を入れようとした計画が失敗した物語り。男と情婦との計画では、次のことを本妻が叶えぬなら、口実に本妻をおいだすものであった。1.本妻は緋のはかまが縫えるか。 2.本妻の秘蔵する三味線を情婦に貸してくれるか、 3.本妻の秘蔵する琴を情婦に貸してくれるか、 4.本妻の大切な蘇鉄の木を情婦にくれるか、以上の順で話しをもちかけ、つぎつぎに本妻が実行するので計画は失敗して行く。

A mukasi mi janourani nakano joi hu:huga aqta  
昔 宮之浦に 仲の よい 夫婦が あった

aqta tokoiga ro:ju mon zjaqtaka otokono  
(言いよどみ) ところが どういう もの だったか、 男の

hitoga ki ga kawaqte mi janrano maciharureni  
人が 気が 変わって、 宮之浦の 町はずれに

ikenjano onnano hitoi oq tokini maiban iku  
一軒家の 女の 一人 いた ときに、 毎晩 行く

note naqte soiba honsaiga mjo:na koq zjato  
ように なって それを 本妻が 妙な こと だと

mote cukete iqte mita tokoiga hutai so:dan-  
思って、 あとつけて、 行って 見た ところが 二人 相談

ne sijoqte do'sitemo ano kazukoba<sup>(24)</sup> morosannja  
を していて 「どうしても あの 和子を 戻さなければ

ikaneci cijokoto<sup>(25)</sup> hutai hu:hunja naranaja  
いけないって。 千代子と 二人 夫婦には 成ることは  
(言いまちがい)



na:Nka: dositemo modosanNnja ikaNga sen don-  
出来ないから、 どうしても 戻さなければ いけないが、(意味なし)どん

na huni site modoseba jokatokai jutaja ci-  
な 風に して 戻せば よいのかい」と言ったら、 千

jokoga ju:nja ano wa:neno<sup>(26)</sup> kazukowa ma hino  
代子が 言うには 「あの あんた所の 和子は まあ 緋の

hakamao nuiya naijokaine cjutaci sa: sija:-  
はかまを 縫うことが できようかいね」と言った。 「さあ しらな

Nnjo nuiya naijokae soimo ju:te mijanNnja  
いよ。 縫える だろうか。 それを 言って 見なけりゃ

waka:N hona son hino hakamao nuiya naebajo  
わからない。 そんなら その 緋の 袴を 縫うことが できればね、

jokabaqci nuija na:Nto se:ba mo soide hito-  
よいけど 縫え ないと すれば、 もう それで、 一

cude hanete<sup>(27)</sup> hutai meotoni nanpa cute jaqta-  
つて 戻して 二人 夫婦に なるよ」と言って なった

ci soika: sono onagoga sono banNa cukekake-  
って。 それから その 女が その 晩 (男の)あとをつけ

te kite<sup>(28)</sup> dokoni itacjoi jokato mote kita to-  
て 来て、 どこに 行っているかと 思って 来た と

koiga hutai sono banasjo hino hakamano hana-  
ころが、 二人 その 話を、 緋の 袴の 話

sjo sijoqtaci son hino hakama (cju)wa iken  
を していたとさ。 「その 緋の 袴 と言うのは どのように

site cukuqtokai cju:taja konen sitejo: kone-  
して 作るのかい」と言ったら、 「こんなに してよう、 こんな

N site akaka kiede konen site watamo irete  
に して 赤い 布で こんなに して 綿も 入れて

cukuqto jaro: cjuta…… sosite sono onagowa  
作るの …… だろう。」と言った。 …… そして その 女は

mo honSaja sugu modoqte kite iesame hosita  
もう 本妻は すぐ もどって 来て、 家の方へ。 そした

tokoiga asuno-asai naqta tokoiga karuko  
ところが、 翌朝に なった ところが 「和子、

ma: ano hakamao nuiya naqkae cjuta tokoiga  
まあ あの 袴を 縫うことが、出来るか」 と言った ところが

nuiya naqdo: cjutaci hona nu:te me cjutete<sup>(29)</sup>  
「縫えるよ」 と言ったって。「そんなら 縫って 見よ」 と言っておいて、

soide kiego ko:te kite sosite hino hakamao  
それで 布を 買って 来て、 そして 緋の 袴を

nu:te sohite tonozjoni watasite tonozjo:pa  
縫って そして 夫に 渡して 夫が

moqte iqtaci mata asuno-banmo sono to:i  
もって 行ったって。 又 翌晩も その 通りに

mata midino to:ini sono onayon tekoisame  
又 右の 通りに その 女の 処へ

iku monzjaka: cukekakete ita tokoiga hutai-  
行く ものだから、 あとつけて 行った ところ 二人

no ginmiga koizja mo totemo ai zjapa aiba  
の 吟味が 「これでは もう とても あれ だよ。 あれが

samisenno daizini sicionga aiba samisenno  
三味線を 大事に しているが、 あれを、 三味線を

kase cjute mijokaici samisenno daizini  
貸せ と言って 見ようかい」と。 「三味線を 大事に

site mo: kanziNsamani<sup>(30)</sup> sicion mon zjaka:  
して もう 勧進様に している もの だから、

soi so:danno site me soiga so:danni na:Nto  
それに 相談を して 見よ。 それが 相談に ならないと

se:ba mata nantoka na:Nnja na:Nga cjute  
すれば また 何とか ならなきゃ ならないよ」 と言って

jute ho:sita tokoiga hutaja mo samisenno<sup>(31)</sup>  
(言って)。 そうした ところが、 二人は もう 三味線の

hanasjo sijoi mon zja koikosa kasannja ikan-  
話を している 様子 だ。 これこそ 貸さなければ いけな

pato omote kazukowa…… modoqte kite hosite  
いがと 思って、 和子は …… もどって 来て、 そして

asitano-asa sono cijokona kaike kite sami-  
翌朝 その 千代子が 借りに 来て 「三味

senno ke:te kuenka ha:i jasi kogzja hai  
線を 貸して くないか」 「はあい。 やすい ことだ。 はい。

moqtaite<sup>(32)</sup> kue moqtaite hi:te uto:te odoqte  
もって行って くれ。 もって行って 弾いて 歌って 踊って

kue cjute jute motasite jaqta ho:sita toko-  
くれ」 と言って (言って) 持たせて やった。 そうした ところ

ina mata sono aibanmo itate mieba mo koizja  
ろが、 また その 翌晩も 行って 見れば もう、 「これでは

toqtemo mo damasja na:nda konda koto: moq-  
とても もう 欺すことは 出来ないよ。 今度は 琴を もっ

cionna ano kotowa kasuka kasankaga mondai  
ているが、 あの 琴は、 貸すか 貸さんかが 問題

zjana soi hito:cu mata ju:te mijankai (cju-  
だが、 それ 一つ また 言って 見ないかい) と言

taci) hosite cijokona asitano-asa karuko  
ったって。 そして 千代子が 翌朝 「和子、

oini ano sono koto: kasite kuenkai ha:i  
私に あのう その 琴を 貸して くないかい」 「はい。

moqtaite hi:te hi:te ikuwademo hi:te kuen-  
もって行って、 弾いて 弾いて いくらでも 弾いて くれな

kajo (cjute) ano zioq zjaiwajo: cjutaja  
いかよ」 と言って、 「あの 上手 だわね」 と言ったら、

zjoqzja nakabaqcimojo: cjutaci soika: mada  
「上手では ないけれどもね」 と言ったて。 それから 又

sono banna mada cukekakete itate mita toko-  
その 晩は 又 跡をつけて、 行って 見た ところ

iga konda mo koizja toqtemo damasa na:nci  
ろが、 「今度は もう これでは とても 欺すことは できない。

aiga hito:cu sotecuno kio moqcjon ga soa mo  
あれが 一つ 蘇鉄の 木を もっているが、 それは もう

toqtemo daizini site inocika nibanme zja#a  
とつても 大事に して、 いのちから 二番目 だよ

aikosa ajo kasa na:N(00)ka kasan cjukamo  
あれこそ。 あれを 貸すことは できない(00は言(言いざし)貸さん と言うかも  
いまちがい?)

siendo aikosa kasan cjukamo sienga itate  
知らないぞ。 あれこそ 貸さないというかも 知らないが、 行って

me'ci sosite kaike kitaci son toki kazukoga  
見よって。 そして 借りに 来たって。 その 時 和子が

iwakuni samisen kasite koto kasite sorejori  
曰くに、 「三味線 貸して、 琴 貸して それより

daizina oqtaba kasite naniga osikaro oniwa-  
大事な 夫を 貸して、 何が 惜しかる、 お庭

no sorecu (cjutaci) to:to: honsaiga jonona-  
の 蘇鉄」 と言ったとさ。 とうとう 本妻が 世の中

ka: toqte toqtacu to:qtacjudesujo hutai  
は (言いまちがい) とつたて。 (33) 通つたと言うですよ、 (34) 二人

hu:hude to:qtaci  
夫婦で 通つたて。

### 3. お 祭 り

録音日時 1967年7月18日

録音場所 宮之浦 田代旅館

話し手

(略号)	(氏名)	(性別)	(生年)	(職業)	(居住歴)
A	岩川シオ	女	明治29年生	農業	宮之浦で生れずっと居住
C	岩川貞次	男	39年生	商業	0才~18才(在郷) 18才~46才(大阪市) 47才~現在(在郷)

解説： 本来4月10日のお祭り日を4月3日に変更した町の神社の世話人Cは町民にうらまれたということから、現在の祭り当日がさびしいものになったと、お互に嘆く。昔は当日は非常に賑やかな行事がくりひろげられて、島内の小学校の生徒も弁当ごしらえで宮之浦の神社の祭りに集まったものだ。中には神社にまいらず芝居だけを見るのが目的の人もいた。芝居には話手もそれぞれ役者になって演じたものだ。舞台にあがって唄をうたったこともある、などの追憶談に花が咲く、最後にAの民謡(漁師のうた)が唄われる。

A teiziozi<sup>(35)</sup> konogorono siŋaqtoka: ikena ka:-  
真次さん、 この頃の 4月10日は どんな 様

kuijo<sup>(36)</sup>  
子かい。

C a: ma: kjonenmo soide so:do: zjaqtapa saq-  
ああ まあ、 去年も それで 騒動 だったが、 さっ

pai cikaporowa mo: sabisju: naqte koika:  
ぱり ちか頃は、 もう 淋しく なって。 これから

moton to:i hitocu sennja na:N cjute zinsja-  
もとの 通りに、 ひとつ しなければ いけない と言って、 神社

no jakunimo joqte so:danosi jonpa igen  
の 役人も 集まって、 相談を して いるが、 どんなに

naqtoka kjonenna jo imano: siŋaqtoka o hini-  
なるのか。 去年はよう、 今の 4月10日を 日に

cio kaete mitana: cju: koqde soide: e: hi-  
ちを 変えて 見たなら と言う ことで、 それで ええと 日

nicio miqkani site sitatojo tokoiga soio  
にちを 3日に して、 (祭)したのよ。 ところが それを  
を

kju:ni kaeta ju:te mo: toko:zju:ka: semeko:-  
急に 変えた と言って、 もう ところ中から 責めた

saete<sup>(37)</sup> waraeme o:tapa<sup>(38)</sup>  
てられて、 ひどい目に 逢ったよ。

A zjapa  
そうだよ。

C Ndomimo<sup>(39)</sup> kotosika: jakuni nni naqta baqkai zja-  
私も ことしから 役人に なった ばかりだ

ga mo semeko: saetaga  
が、もう 責めつけられたよ。

A ima mukasino gocja nosite mo' kansamano  
今は 昔の ようには なくて もう 神様の

macui sitemo ni nge nna zju: ninbaqkai mukasja  
祭を しても 人々は 10人ばかり、 昔は

sonna monzja nakaqtaga  
そんな ものでは なかったよ。

C nigijakana mon zjaqtado: ano mikosio kacui-  
にぎやかな もの だったぞ。 あの みこしを かつい

de ikuto ju:to sa:kino naniya zu:qto murao  
で 行くと いうと、 先の 何が ずっと 村を

hitomawari mawaqte kuqto juto si:no howa  
一廻り 回わって 来ると 言うと 尻の 方は

ma:ra ima deta tokoini arujo:na koqde warae  
まだ 今 出た ところに あるような ことで、 すごく

nigijakana mon zjaqtaganao  
にぎやかな もの だったがね。

A honnokote waga koya doke oqdeka zjaijo ima  
ほんとに わが 子が どこに おるの だろうか、 今

hunko: sa<sup>(40)</sup>oq cjute so:do: sun monzjaqtaga  
踏みつけられる と言って 騒動 する ものだったが、

imananda mo:.....  
今などは もう ……。

C hoika: mikosisamaya sumuto konda hamade  
それから みこし様が 済むと 今度は 浜で、

hamadebai ju:te bento: hiraitenigijakani  
浜出張り と言って 弁当を 開いて、 賑やかに

sun mon zjaqtaya imajora mo sabisi: monzjao  
する もの だったが、 今ごろは もう 淋しい もの だろう。

A so:jo utotai odoqtai siodokja jo:si hame:  
そうよ。 唄ったり 踊ったり, 潮時は 良いし, 浜へ

decioqte so:ro: sun mon zjaqta uto:tai oro-  
出ている, 騒動 する もの だった。 唄ったり 踊

qtai toinamonwa toinamon wake-sja wake-side  
ったり, 年寄り 年寄り, 若い者は 若い者で

sicjoqta<sup>0</sup>a  
あるものだったよ。

C matana: ano gaqko:karajo a: kensja jaqta  
又ね, あのう 学校からさ, ああ 県社 だった

mon zjakara zinsjano kakusikigana: soide:  
もの だから 神社の 格式がね。 それで

jakusimazju:no gaqko:no seitoga kuqdakedemo  
屋久島中の 学校の 生徒が 来るだけでも

koa nanzennte joijoqtapanao  
こら, 何千人て 寄り集まるものだったがね。

A zjaqta dokoizja nakado<sup>(41)</sup>  
そうである どころでは ないよ。

C soi jakara nao nigijakaqta…… ima: kono koa  
それ だから なお にぎやかだった。 …… 今はこの これ

sju:sengoka: koqci saqpai jaqsen<sup>(42)</sup>gote naqta  
終戦後から こっち さっぱり 駄目に なった,

wao  
あなたね。

A honnokoq zja wa:no ju: gote suqpai mo nanga  
ほんと た あなたの 言う とおり, さっぱり もう 何が

nandega zjaijo  
何やら だろうか。

C koimo ma nantoka site jaqpai ni<sup>0</sup>ijakani  
これも まあ 何とか して, やはり 賑やかに

sennja ikante japanao nenni iqdo ku: hitocu-  
しなければ いけなの だがね, 年に 一度 来る 一つ

no gokurakudemo aqto jaka: kono simano koq  
の 娛樂でも あるの だから この 島の こと

(43)  
zjaeba nigijakani site hitocu icin cidakeja:-  
であれば 賑やかに して ひとつ 一日だけは

ne: jakusimazju: asobu cju: hini moton toi  
ね、 屋久島中 遊ぶ という 日に、 もとの通り

naosannja ikan ganao  
直さなければ いけないね。

A zja: dokoi zja naka mukasa<sup>(44)</sup> so: otomomo  
そうである どころ じゃ ない。 昔は (言いまちがい) お伴も

site hunko:sa:n goto aqta ũa ima:jo macuinja  
して 踏みつけられる ように あったが、 今はね、 祭りには

zju:ninbaqkai kite ete sosite sibaja cjueba  
10人ばかり 来て おいて、そして 芝居 と言ったら

toko:zju kaotai innotai bentō: moqte o:so:-  
所じゅう 背おったり 荷なったり 弁当を もって 大騒

ro:re site saikuga igen naqtojaokai aja  
動 (言いまちがい) 歩くが、 どんなに なるのだろうか あれは。  
して

C soiga aqpai jakusimano imano gorakude gora-  
それが やはり 屋久島の 今の 娛樂で、 娛樂

kuno sukunai tokoi zja mon zjaka: soi icine-  
の 少ない ところ な もの だから、 それを 一年

Nni iqdo tanosimide minna hataku mon zjaka:  
に 一度 楽しみで、 みんな 働く もの だから、

soide nao soren aqtojo  
それで なお そんなに あるのよ。

A nnja soja soi zjato jabaqci kansamanja omaira  
いや、 それは それ なんだ けれど、 神様には お参りは

senzi oqte sono bentobaqkai moqte sibaibaqkai  
しないで いて、 その 弁当ばかり 持って、 芝居ばかり

miqtoga kini kuwantojo oja  
見るのが 気に 喰わないのよ、 わたしゃ。



- C zja zja: zja: soiga sonatoga aqdo' hoika:jo:  
 そうだ、 そうだ、 そうだ。 それが そんなのが あるぞ。 それからよう、
- mata: kansama: soqcinoke sicjooite hosite  
 又 神様は そっちのけ しておいて そして
- ete minna mijazu eq sibai mijazumo' hazun-  
 おいて、 みんな (言いさし) (言いまちがい) 芝居、 宮相撲が はずん-
- denao (A so:jo) zibunde e: jakusjani na:nnja  
 でね、 (そうよ) 自分で よい 役者に ならなければ
- na:N cute soa ma kenkao sitaihite mata hute:  
 ならない と言って、 そら まあ 喧嘩を したりして。 又 大きい
- sibaio jo: jari joqtawa zenno iqto:  
 芝居を よく やる ものだったわい、 銭が 要るのを。
- A mukasa honnokote (C N:) cju:singurabaqkai jan  
 昔は ほんとに (うん) 忠臣蔵ばかり やる
- moN zjaqtapa  
 もの だったよ。
- C ano cju:singuraN tokja omitacia iqpen omja:  
 あのう 忠臣蔵の ときは あんた達は、 (45) 一っぺん (46) あんたは、
- nanzja nakaqtake: ano okaruka nankade deta  
 何では なかったかい。 あのう おかるか なにかで 出た
- kotoga aja sen zjaqtake  
 ことが ありは しな かったかい。
- A zjaqtaro (47) okaruni oimojo  
 そうだったよ。 おかるに 私もよ。
- C e: oimojo iqdo a:e: iqkwan tosi jaqtakaine:  
 ええ。 私もね、 一度 (言いはどみ) いくら の 年 だったかいね。
- zju:hacintosi jaqtakai mo jonzju:nannen naqdo:  
 18の年 だったかい。 もう 40何年に なるよ。
- a: imano senbonzakurano ano: ha: nancju:tokai  
 ああ 今の 千本桜の あのう ほれ 何というのかい。
- susijanodan ai jarasaetene: azaja akahazi  
 すし屋の段 あれを やらされてね、 ひどく 赤耻

ke:ta kotomo aNða  
かいた ことも あるよ。

Ā e: susijano ai zjaro  
ええ、 すし屋の あれ だろう。

C osato osato  
お里。 お里。

Ā osato jaro  
お里 だろう。

C zja:ro zja:ro  
そうだろう。 そうだろう。

Ā ……zjozu zjaqtapa harja zjozu zjaqtapa oimo  
上手 だったよ。 ほら 上手 だったよ。 私も

wa……  
あんた…。

C watasino nawa osato to mo:su cjutena:  
「私の 名は お里と 申す」 といってね。

Ā …………… 笑い

C <sup>(48)</sup> ja moN zjaqtapa(笑い) <sup>(49)</sup> omoidaketa omoidaketa  
そうであるもの だったよ。 思い出した。 思い出した。

Ā oimo wazaika naNnen mae jaqtaka Ndamo uto-  
私も ずいぶん 何年 前 だったか わしも 唄

wannja sumanzi bute:ni aqaqte utoikata jaq-  
わなければ ならなくて 舞台に 上がって、 唄うもの だっ

ta tokini……  
た 時に ……。

C ha zjao zjao uta cjueba osioba wa: wa:zai  
はあ そうだろ。 そうだろう。 唄 と言ったら、 おしおさん あんた、 ひどく

mukasika: koeno e: onago jaqtapa hitocu  
昔から 声の よい 女 だったが、 ひとつ

uto:te ku kikasenkai mo nayo kikanaga ano:  
唄って (言いさし) 聞かせんかい。 もう 永く 聞かないよ。 あのう

soa nagono bonoroinojo ano: deNcuboodoin  
そら (言いまちがい) 盆踊りのね、 あのう 錢壺踊りの

tokoi hitocu hitohusi kikasite kuijankai (50)  
ところ、 一つ ひと節 聞かせて くれなさんかい。

A deNcubooroikaja  
錢壺踊りかね。

C jo:  
うん。

A aja oja kinomo ototemo uto:taga oja mo dae- (51)  
私は (言いよどみ) 昨日も 一昨日も 唄ったよ。 私は もう 疲

cjoNyane:  
れているんだがね。

C hitohusijo .  
ひと節さ。

A hokano utademo uto:kai honna  
外の 唄でも 唄おうかい、 それなら。

C jo: hokan utademo nandemo e:ga hitohusi  
うん。 外の 唄でも 何でも よいよ。 ひと節

kikase  
聞かせい。

A nanNjo utoeba jokakaine:  
何を 唄えば よいかいなあ。

C nandemo jokaro  
何でも よいよ。

A sa: honna kasaodoidemo utote mijokaine (52)  
さあ、 ほうなら 笠踊りでも 唄って 見ようかいなあ。

C e sohite sohite kuijankai kasaodoi wasueta-  
ええ、そして (言いよどみ) おくれんかい。 笠踊り 忘れた

tonara deNcubo ano kotosja mijakokarademo  
のなら 錢壺 あのう 「ことしゃ 都から」でも

e:janaikai  
いいではないかい。

A soizjane: kotosja mi:jakokara saqsa daiko-  
それではね 唄「ことしゃ 都から サッサ 大黒

kusamano o:toqzjono e:bisusamaga owatai zja  
様の 弟じょうの えびす様が お渡り じゃ

C a: makotokana  
合の手「ああ まことかな」

A a: mako:tode: gora:ru owatai nasarete kui-  
唄「ああ まことで ござる お渡り なされて、 杭

seto<sup>(53)</sup> tomaigo: no<sup>(54)</sup> o:mizei<sup>(55)</sup>  
瀬と 泊河の おおみぜい」

C torasjoto (i)jareba toro toro torojo  
合の手「獲らせうと 言いやれば トロ トロ トロよ」

A to:reba icima:Nhaqsen toriagio medetaina  
唄「獲れば 1万8千 獲り揚げう。 めてたいな」

C o:iija do:qkoi  
合の手「おおいや どっこい」

A sa:ba:mo cu:re cu:re sa: ici:ma:Nyo:sen  
唄「鯖も 釣れ 釣れ サー 1万5千

sja:rejo  
シャレヨ」

C o:iija do:qkoi jaqpai koa:  
合の手「おおいや どっこい やはり これは。

A sa:maga hunesa:e sa: to:reba joi irosja:re  
唄「さまが 船さえ さあ 獲れば よい。 イロシャーレ

e: sja:rejo:  
エー シャーレヨ」

C ha waqzai nusja to:sja toqtemo mukasino  
はあ。 ひどく お主は 年は とっても 昔の

zju:hacino koe jaqpai sicjoqto jane:  
18の 声 やはり しているの だね。

A Nda mo jaqsendo: (C u:N) mo hapa cuNnukete mo'  
私は もう 駄目よ。 (うん) もう 歯が 抜けて もう

hita: ma:raru  
舌は 回らず。

C mo: to:simo toq<sup>(57)</sup>cjoqta: koemo otetakato omo-  
もう 年も とっている人は 声も 落ちたかど 思

cjoeba jaqpai zjoqzjawai  
っていると、 やっぱり 上手だわい。

#### 4. 海 の 遭 難

録音日時 1967年7月19日

録音場所 宮之浦 話し手(D)の自宅

話し手

(略号) (氏名) (性別) (生年) (職業) (居 住 歴)

C 岩川貞次 男 明治39年生 商業 既出

D 渡辺好助 男 25年生 無職 ~36才(在郷) 37~38才(大阪市)  
39才~現在(在郷)

解説： 宮之浦の町外れの高地に居住するDをCが訪ねたが、目の下に眺める凧の海のことから、Dが昭和23年冬、大成丸(30トン)という木炭をつんだ船に便乗して鹿児島へ渡ろうとしたとき、凧であった海が勿ち季節風に襲われ、大隅半島の佐多岬で遭難して九死に一生を得た体験をつぶさに語る。

C josisukeozi owa hisasibui oja jaqte kitaga  
好助さん、 私は 久しぶりに 私は やって 来たよ。

cjanomini kitaga mukasidemo kataroto omote  
茶飲みに 来たよ、 昔でも 語ろうと 思っ。

D sa: sa: do:zo<sup>(58)</sup> a(0)aci kue mo kokowa sususu-  
さあ さあ どうぞ 上がって 呉れ。もう 此処は 涼し

site kowa e:wai  
くて こりゃ よいわい。

C ma iqsjobiNmo sagete kitatojaga: daika ba-  
まあ 一升でも さげて 来たのだが 誰か 奥  
(59) baN-simo sokon sitani isomontoidemo hasira-  
さんの人も その 下に 磯もの獲りでも 走ら  
(60) sebane joka siokega deku dekuigote an ga  
せればね、 よい おかずが (言いさし) 出来そうに あるよ。

D ima babamo kura:i na:ginno eka isomontoi  
今 家内も 来るよ。 凧が よいから 磯ものどりに

itate misoni nite kutemo ero:  
行って、 味噌に 煮て 食っても よいぞ。

C ho:nnokote mata na:ginno e: koto kjowa kazea  
ほんとか。 また 凧の よい こと。 今日は 凧は

nanno kaze jaokaine koja haenkazezja: ne:-  
なにの 凧 だろうかね。 これは 南の凧では ない

jokaine:  
だろうかね。

D jaqpai haede (62) jaro kowa kazeja  
やっぱり 南凧 だろう これは。 凧は。

C nocja sikasi: aro sikete kuqtoja ne:jokai  
後には、 しかし 荒く 時化て 来るのでは ないどころか。

D koen hijajaqpai ogubaika(z)ede kowa nagi zja  
こんな 日は やぱり 西南の凧で (63) これは 凧 だ。

C soneN ieba' josiozi ano taiseimaruno iqkeN-  
そう 言えば 好助さん あのう 大成丸の 一件

ja konna hizja nakaqtatoka:  
は、 こんな 日では なかったのか。

D aja ma sjo:wa nizjunininen zjaqbakaine:  
あれは まあ 昭和 20 (言いさし) 2年 だったかいね。

C nineN zjaqtakai haemoN zjane:  
2年 だったかい。 早い もの だね。

cjo:do ma teisen to:zi jaqtaga zju:nigacuno  
丁度 まあ 停戦 当時 だったが、 12月の

zju:hicinino banni sorekusa biro:N biro:<sup>(64)</sup>  
17日の 晩に それこそ ビロン ビロン

sita wa: aḡaibaeno<sup>(65)</sup> nagino hi jaqta tokoiga  
した あんた、 西あがりの南風の 風の 日 だった ところが

soini wa: neqka: ku:sju:ḡo ja moN zjakara  
それに あんた、 みんな 空襲後 だ もの だから、

hunewa nasi mo sa: tozecusi ko:kaiwa tozecu  
船は なし、 もう それは、 杜絶し 航海は 杜絶

sicjoqta tokoiḡo soini taiseimaruwa sumio  
していた ところよ。 それに 大成丸は 炭を

roḡpjaḡpio: cunde kagosima iki ja cju: moN  
600俵 積んで 鹿児島 行き だと言 もの

zjakara miN:nano-siga ma binzjo: site nori-  
だから みんなの連中が まあ 便乗 して 乗り

konde zenbu okjakusanto seninto site haci-  
こんで、 全部 お客さんと 船員と して 80

zju:nanmei jaqtaro ḡocjo aḡḡa soini wa:  
何名 だったろう ように あるが、 それに あんた、

cjo:do ḡoḡono joziḡoro jaqtaga mijaNurao  
丁度 午後の 4時ごろ だったが、 宮之浦を

dete biro:N biro:N sita ma naḡi jaqtaga  
出て ビロン ビロン した まあ 風 だったが、

cjo:do takesimano<sup>(66)</sup> henni nisanzikan hasiqte  
丁度 竹島の 辺に 2,3時間 走って、

takesimahukinni ita tokoini cjo: wa nisikara  
竹島付近に 行った ところに、 丁度 あんた、 西から

o:ḡumoḡa aḡḡate mo: o:ḡariḡa sitato ja  
大雲が 上がって、 もう 大あがりか<sup>(67)</sup> したの だ。

C e: waqze:kaḡcuo…… kimoḡa cubunḡoto naḡtao  
ええ、 おそろしかったろう …… 肝が つぶれるように なったろう。

D sono wa agai no kujosa cjuwa mo sa: nanzju:-  
その あんた、 上がり風の 強さ …… と言うは、 もう さあ 何10

nenburino agai jaqtarasi:wai (C e:) so:site  
年ぶりの 上がり だったらしいわい。 (ええ) そして

ma iqsjo:kenmei kikaiwa ma:qte satanomisaki-  
まあ 一所懸命 機械は 回わって 佐多の岬

ni mukete ma hasiqcjoqta to:to: sono kazeto  
に 向けて まあ 走っていた。 とうとう その 風と

namino tameni: wa: tomono ho:kara e: nihen  
波の ために あんた、 船尾の 方から、 ええと、 二へん

o:namio kuro:te (C ha:qra) sosite wa to:to:  
大波を 喰って (あらっ) そしたら あんた、 とうとう。

C sonen ningenga soa hacizju:ninmo noqcjoqta-  
そんなに 人間が それ 80人も 乗っていた

toni na'mi suqka:ket<sup>(68)</sup> mizubuneni naqtatokai  
のに、 波が ぶちかけて 水船に なったのかい。

D ko:ho:no huneja tomo: umiN nakae cuqkonde  
後方の 船は 船尾を、 海の 中に 突きこんで

namika: nomarete sono tokino mo: sono soko-  
波に のまれて、 その ときの もう その (言いまち

mo hunazokoni noqcjoqta okjakusanno-siga hi-  
がい) 船底に 乗っていた お客様の連中が、 悲

meio agete o:sawagini naqte oja ma kanpanni  
鳴を 上げて 大騒ぎに なって。 私は まあ 甲板に

noqcjoqta mon zjakara sosite hjoqto hejaka:  
乗っていた もの だから、 そして ひょっと 部屋から

tobidasite mita mitatokoija so:sita tokoija  
飛び出して 見た。 見たところ だ。 そした ところが、

ma wa: gaqcu i huneja ma kikaimo enzinmo  
まあ あんた、 全く 船は まあ 機械も エンジンも

mi:nna mo hiqtomaqte umiN nakae ko sakadaci-  
みんな もう 止まって、 海の 中に このように 逆立ち



ni naqte omoteno ho.....  
に なって 表の 方 .....

C sosite omija nanni nanni cukamaete tasukaq-  
そして あなたは 何に (言いよども) 掴まって 助かっ

tatatoka  
たのか。

D N: oja mo sono janeno janeno hasirani ziq-  
うん。私は もう その 屋根の (言いよども) 柱に じっ

to cukamaqte ma hitoiki sicjoqta tokoroga  
と 掴まって まあ 一息 していた ところが、

mata sono janemo zenbu mo ucikowasarete mo  
又 その 屋根も 全部 もう うち壊されて、 もう

maqta ku sono hunega mokuseN zja moN zjakara  
全く その 船が 木船 だ もの だから、

hadakabuneni naqte mo sikatanaku cukamo  
裸船に なって もう 仕方なく 掴もう

sakimo<sup>(69)</sup> naka joni naqte konda: do:nika ko:-  
方法も ない ように なって、 今度は どうにか こ

nika site ma buriqcino hasirani cukamaqte  
うにか して まあ ブリッジの 柱に 掴まって

oqta tokoroga cui sono buriqcimo mo uciko-  
いた ところが、 つい その ブリッジも もう 打ち

wasarete miN:Nano mo: hacizju:nanmeino  
壊されて、 みんなの もう 80何名の

zjo:inga zenbu mo mijija hidarini cirabara-  
乗員が、 全部 もう 右や 左に ちらばら

ni naqte cjo:do son tokiga zju:nizi jakanno  
に なって、 丁度 その 時が、 12時 夜間の

zju:nizihanno zikokudesitaka<sup>(70)</sup>  
12時半の 時刻でしたか。

C maqkurajamikai  
まっくら闇かい。

D maqkurajami jaqtatojo  
まっくら闇 だったのよ。

C sa iqsun sakimo mientoja  
さあ、一寸 先も 見えないのかい。

D o: mientoja soiga wa: satamisakija ma to:-  
おお。 見えないのよ。 それ(7)が あんた 佐多岬は まあ 燈  
daimo mo ucikue:te na:imo nakatojo  
台も もう うち壊して、 なんにも ないのよ。

C senso:de  
戦争で?

D a:  
ああ。

C ha: ha:  
はあ。 はあ。

D so:site mo sa: dokoga nanjara tasukebunemo  
そして もう さあ どころが 何やら、 助け船も

kuru tedatemo naisi densin denwamo mo: to-  
来る 手だても ないし、 電信 電話も もう 杜

zecu sicjorusi mo: honto mo: kokomadede  
絶 しているし、 もう ほんと もう ここまでで

zecumei zjato omo:te mo akiramecja oqta  
絶命 だと 思って、 もう あきらめては いた

wake jaqtatojone:  
わけ だったのよね。

C akirameki:ya naqtakaja  
あきらめきれたのかい。

D mo sa: sumino uei noqcjoru rencju: cjuwa  
もう さあ、 炭の 上に 乗っている 連中 と言うのは、

nizju:nin gurai sono mokutan no ueja zoroq:to  
20人ぐらい その 木炭の 上や、 ぞろぞると

ikadano ue: noqta jo:ni mo nagasaete simo:-  
いかだの 上に 乗った ように、 もう 流されて しまっ

tena:  
てね。

C kodoma: nocjoraN zjaqtaka  
子どもは 乗って いなかったか。

D mo kodomowa karu:tamamano rencju:mo taku-  
もう 子どもは 背おうたままの 連中も 沢

san oqtatojo  
山 いたのだよ。

C goainagene:<sup>(72)</sup>  
かわいそうにね。

D rokuniN kodomomo ano: iqso:none: saito:<sup>(73)</sup>  
6人の 子どもも あのう 一湊のね、 斉藤

cju: hitono aN musumenanka ko: karu:tamama  
という 人の あのう むすめなんか 子を 背おうたまま

karada ojava karada: aqqtakeredomo<sup>(74)</sup> asuno-  
(言いまちがい) 親は 体は 揚がったけれども、 翌

asa: son kowa nukete orantara<sup>(75)</sup> obidake ta-  
朝は その 子は ぬけて いないのだよ、 帯だけ た

sukigakeni site  
すきがけに して、

C ..... minnade iqkwabaqkai sindatoke  
..... みんなで いくらばかり 死んだのかい。

D cjo:ro jonzju:joninbaqkai sindatojona:  
丁度 44人ばかり 死んだのだね。

C hute: gisei jaqtana:  
大きい 犠牲 だったね。

D hanbun hanbun<sup>(76)</sup> soiya jokuasa konda cjo:do  
半分 半分。 それが 翌朝 今度は 丁度

asano kuzi gozen kuzi jaqtaka jokuasano  
朝の 9時 午前 9時 だったか、 翌朝の。

satano izasikini<sup>(77)</sup> micisiode mocikomarete  
佐多の 伊座敷に 満ち潮で もち込まれて、

so:site asikono sono hetade e: sjo:bo:gumiya  
そして あそこの その 岸辺で、 ええと 消防組が

kju:sai site kurete so:site ma: ci:saka  
救済 して くれて、 そして まあ 小さい

kobuneo dasitena: so:site ma soini ma huta-  
小舟を 出してね、 そして まあ それに まあ 二人

rizucuzu(cu) nosite hakobi kata ja ikinokorio  
ずつ (言いまちがい) 乗せて 運ぶ 始末 だ 生き残りを。

mo son toki ja mo sora nemusaga cuzukantojo-<sup>(79)</sup>  
もう その 時は もう それは 眠さが 堪えられないよ

na:  
ね。

C so netara warite jaq cjune:  
そう。寝たら 悪いの だ と言うね。

D ha: mo maqtaku soa mo gotaimo kanawanjara  
はあ もう 全く それは もう 五体も 叶わないやら、

hikiapete moro:te igta tokoroga okani sono  
引き上げて 貰って、 行った ところが 陸に その

mokutano taitena: cjan to mata (de) muru jo:-<sup>(80)</sup>  
木炭を 焚いてね、 ちゃんと また 眠る よう

ni sikunde aqte sokoni ma sono sju:jo:  
に 準備して あって、 そこに まあ その 収容

seraretakeredomo<sup>(81)</sup>  
せられたけれども

C son toki iken zjaqtake a: tasukaqtato omo-  
その とき どんな だったかい。 ああ 助かったと 思

takaja  
ったかい。

D ha: mo: nanmo kanmo nemusatonā:  
はあ もう、 何も かも 眠さよね。

C a: nemusare  
ああ。眠さで。

D gotaiŋa mo kosja kanawan tojo  
五体が もう 腰は かなわないのよ。

C naruhodo  
なるほど。

D mo: joko(i) naqtamama nai site sosite wa  
もう 横に なったまま なに して、 そして あんた、

ahikono seineNno-siga ma ironna ma sono ki-  
あそこの 青年の連中が、 まあ いろんな まあ その 着

monoo moqte kite kisete kurete ma sosite  
物を もって 来て、 着せて くれて まあ そして

ma kajuno mizu mitajona kajuo susuqte so:-  
まあ 粥の 水 みたような 粥を すすって、 そ

site ma to:to: ma tasukaqta wake jaqtaigana:  
して まあ どうとう まあ 助かった わけ だったんだがね。

(C e:) soikara sono ma hiwa konda icizicu so-  
(ええ) それから その また 日は 今度は 一日 そ

no kubiziqken zja cutena: ahikono satano  
の 首実見 だ と言ってね、 あそこの 佐多の

cju: zaisjokara asidomeo seraete so: site mo  
駐在所から 足留めを せられて、 そして もう

sitaiga zu:qto aqpai son mo uite aqaqte  
死体が ずっと やはり その もう 浮いて 上がって、

kitari okio nagaete ikutokomo<sup>(2)</sup> sono aqtoja-  
来たり、 沖を 流れて 行くのも その あるのだ

kedomo siketoru mon zjakara saomo todokansi  
けれど、 時化している もの だから、 棹も とどかないし

hunemo deraren si site minagara jaqtatona:  
舟も 出ないし して、 見ながら だったのさ。

mo: onnano-sja: mo kamimo janbarani tokete.  
もう 女の連中は もう 髪も ばらばらに 解けて、

so: site mo: hgoro: N hgoro: N ukisizumi site  
そして もう ヒョロン ヒョロン 浮き沈み して

iku sugata cjuwa hon toni mo kawai sona mon  
行く 姿 と言うは、ほんとに もう 可哀そうな もの

zjaqtatona  
だったのよ。

C mo kono jono…… ikizigoku jaqtatojana  
もう この 世の 生き地獄 だったのだなあ。

D ha:  
はあ。

C ha  
はあ。

D mo wasimo an toki sineba kora ima: mo:  
もう 私も あの 時 死ねば ほれ 今は もう

zju:hicinenkino nenkimacuimo (笑い)heq site mo-  
17年忌の 年忌祭も (せき) して 貰

rocjoq toki jaroto mocjoq toki jaoto omocjo-  
っている とき だろうと 思っている とき だろうと 思っている

q tokoi zja (笑い)  
ところ だ。

C ma soja kjo:wa soa mo e: tokoini miharasino  
まあ それ、今日は それ もう 良い 所に 見晴しの

e: tokoini e: beqso:demo cukuqte zju:hicinen  
良い ところに よい 別荘でも 造って。 17年

tateba jononaka: e: sinda hito ikiqta hito  
立てば 世の中は、 ええ 死んだ 人 生き残った 人

kawaqta mon (D N:) zjaowai soa kjo:wa ma  
変わった もの うん だろうわい。 ほれ 今日は まあ

unto iqsjo moqte kitaka: nomowai  
うんと 一升 もって 来たから 飲もうわい。

D honnokote mo koa: mo enmano cjo:mennja do-  
ほんとだ。 もう こりゃ もう 閻魔の 帳面には ど

hiten mo akasenno hi:te mo: zjoseki naqcjo-  
うしても もう 赤線を 引いて もう 除籍に なって

qN moN zjao goto arai mo iqtokja sinja na:-  
いるもの だろう ように あるわい。もう 暫らくは 死ぬことは で

Nme…… (笑い)  
きまい……。

C ……ma soN tokoide hitocu kjowa iqpai nomo  
まあ その ところで、 ひとつ 今日 一杯 飲もう。

D hai  
はい。

C a:  
ああ。

## 注

- (1) [p. 6] 屋久島電気興業会社をいう。
- (2) [p. 6] moNno は方言の文末助詞「ものを」の意。
- (3) [p. 6] 地区の名。
- (4) [p. 6] 地区の名。waqda は語原は脇田であるかも知れないが、脇田のことを言う。ただし waqka のようにひびく。
- (5) [p. 7] deka は不確かかの意の助詞。ほぼ「やら」に当たるが、あとに推量体の文がつづく。オッデカ ジャイヨ オランデカ ジャイヨ (いるやら(だろう)いないやら(だろう))。ジャイヨは「ぢやるらう」から転じた。
- (6) [p. 7] ciŋo:teiku の i がちた形。
- (7) [p. 7] zjaru+wai (じゃる+わい)
- (8) [p. 8] noritoran の訛り。動詞連用形に「取る」がつくと、動詞の完了・完済を示す。
- (9) [p. 8] siu:sibaqcimo のようにひびく。(話し手の歯のぐあいによるか)。  
cju:baqcimo あるいは cibaqcimo のいずれかで十分。頭の cju: — を生かすか、腹の -ci- を生かすか。
- (10) [p. 8] jao ikaN は簡単に行かない。軽く扱われない。大したもののだの意。
- (11) [p. 8] 大いにたいしたものだ。「何々どころかい、何々どころではない」という表現形式は、問いに対して、むしろそうだと言定するときによく用いられる。
- (12) [p. 8] 種子島の西表(市)のこと。
- (13) [p. 9] 「大変に」とありたいところ。
- (14) [p. 9] zjakarane: の訛り。
- (15) [p. 9] あとに「まだ田舎だった」と言いたいところを、A にへし折られる。
- (16) [p. 10] naqteiku の訛り。
- (17) [p. 10] 語の由来不詳。
- (18) [p. 10] 「ほんとにそうなのだ」の意味。注11 参照。
- (19) [p. 10] siwa: のようにきこえる。
- (20) [p. 11] 「大いに思う」の意味。注18 と同類
- (21) [p. 11] 「為が要らん」の形で「何々しなくてもよい」の意を表わす。
- (22) [p. 12] baqtai na:N は「すっかり成らぬ」の義で、「駄目だ、行き詰った」の意味で用いる慣用句。



- (23) [p. 12] ikancjaga (←ikantojaga) の転。
- (24) [p. 13] 本妻の名前。
- (25) [p. 13] 情婦の名前。
- (26) [p. 14] wa: geno (「わが家の」義) の転。
- (27) [p. 14] つっぱねて、離婚しての意。
- (28) [p. 14] このあとに「すなわち」という語を入れると、意味が通じよい。
- (29) [p. 15] cjuteoite の編形。
- (30) [p. 15] 大事にしていることをいう。
- (31) [p. 15] jute は無しでよいが、話し手は cjute のあとにこれを重ねる癖がある、後にも出る。
- (32) [p. 16] moqte itate を縮めると moqtate とか moqtaite とかになる。後者の -i- は強めの添加か。
- (33) [p. 17] toqtasu のようにきこえる。
- (34) [p. 17] -desujo は標準語的。
- (35) [p. 18] -ozi は年配の人につける敬称接尾語。「叔父」の義。
- (36) [p. 18] 「からくり」の訛り。
- (37) [p. 18] 「責め殺されて」の義 「殺される」は接尾語で「大いに責められて」の意。
- (38) [p. 18] 禍(ワザワイ)を形容詞化し「おそろしい、大変な」などの意に使う。副詞的にも使う。訛形多し。又カ語尾形容詞としても用いる。以下対話に頻出。
- (39) [p. 19] Ndomi は Ndo だけで自称代名詞だが、それと「身」という自称代名詞の複合したもの。
- (40) [p. 19] 「踏み殺さるる」の義。注(37)参照。なお「一るる」の部分には korosaoru (殺さるる), nagaoru (流るる) 式に -oru と変化する。
- (41) [p. 20] 「ほんとにそうだ」の意。
- (42) [p. 20] 「役せぬごとになった」の義。
- (43) [p. 21] 断定の助動詞「じゃ」の已然形「じゃれば」である。
- (44) [p. 21] 「もちろんそうだ」の意。
- (45) [p. 22] 「御身たちは」の義。最高敬意の対称。しかし文末表現はそれに照応しない。
- (46) [p. 22] 「御身は」の義。
- (47) [p. 22] zjaqtado が薩隅方言的。ただし推量形にあらず。
- (48) [p. 23] ja は jai ともいう。断定助動詞。ここでは連体形。
- (49) [p. 23] -daketa は deketa (出来た) と dasita (出した) の混合形。
- (50) [p. 24] 「呉れやらぬかい」の義。
- (51) [p. 24] 「だれているがねえ」の義。

- (52) [p.24] *mi roka ine*: の転。
- (53) [p.25] ともに地名。 *kui se* は本来暗礁の意味だったが、今は固有名詞化したといわれる。
- (54) [p.25] 大魚群をいう。小さい方は *カチ* という。「青味勢」の義か。
- (55) [p.25] 「役せぬぞ」の義。
- (56) [p.26] *toqcjoqhi ta*: の *hi* が落ちたか。
- (57) [p.26] 標準語。
- (58) [p.27] ここでは *baba* は相手の奥さんに対して用いている。「婆」の義だ。
- (59) [p.27] 礫ものは礫でとれる貝類をいう。
- (60) [p.27] 「塩気」の義か。酒の肴。
- (61) [p.27] ' - *de* は余計か。
- (62) [p.27] *ogubaikaze* は *okubaikaze* が普通で、西寄りの南風をいう。
- (63) [p.28] 油を流したような海面のおだやかさをいう。
- (64) [p.28] 西南風をいう。南風が西へ変ることを「上がり」という。
- (65) [p.28] トカラ列島のうち口ノ三島の一つ。
- (66) [p.28] 「大あがり」は風が西へ変わるさい、疾風となるをいう。
- (67) [p.29] *suqkaket e* の長音化した形。 *suq* は強意を示す接頭語。
- (68) [p.30] 「先」の義だが、「…する先もない」という句は、すべがない という意に用いる。
- (69) [p.30] *—desitaka* は標準語的。
- (70) [p.30] 「うちくやして」の転。 *くやす* (埒わす) は古語。
- (71) [p.32] 「業らしなげねえ」の義。「業らし」は「可哀そう」の意味。
- (72) [p.32] 上屋久の漁港名。
- (73) [p.32] *—keredomo* は標準語的。
- (74) [p.32] *orantojaruwa* の短縮形。 *jaru* は断定の助動詞。
- (75) [p.32] 80人中死者約40名、生者約40名だからいう。
- (76) [p.32] 大隅佐多岬の港名。
- (77) [p.33] 「へた」は「沖」に対していう語で、陸寄りの海をいう。
- (78) [p.33] 「続かぬ」を「堪えられない」意に使う。
- (79) [p.33] (*de*) *mur u* は *nemur u* が正しいのか。不確か。
- (80) [p.33] *—keredomo* は標準語的。
- (81) [p.34] *iku tomo* の言いまちがいか。

非 売 品

1968年3月

国立国語研究所 話しことば研究室 発行

東京都北区稲付西山町